

フイヒテ『新しい方法による知識学』（三）

中川 明才 訳

本稿は、J. G. Fichte, *Die Wissenschaftslehre nova methodo* (1796-99) のうち、ヨハン・ゴットフリープ・フイヒテがイエーナ大学で一七九八／九九冬学期に行ったと推定される講義の内容を記録した、聴講者カール・クリステイアン・フリードリヒ・クラウゼによる講義録の本邦初訳であり、今回訳出した箇所は一九講から成る本論のうち、「第二講」補足から「第四講」までに当たる。

なお原典は、『文化學年報』（同志社大学文化学会編）第六十八輯（二〇一九年）掲載の翻訳（二）に記したとおり、「PhB版」であり、それに併せて「アカデミー版」を対照的に用いた。

第二講〔補足〕

第二講——さらに見出してもらいたいのは以下のこととなる。主張されたように、自我概念を構想する者は、この構想という活動を、自己自身によって限定された一活動として定立することなしには、またこの活動を、無限定性もしくは限定可能性からの移行として定立することなしには——この移行がまさに注目されている活動なのだが（上

述の一と二）——、自己を活動的なものとして定立することはできない。限定された活動によって成立する概念は、それと同時に、反定立された非我による限定を受けることなしには、把握できないとされる。限定可能なものとは、先に（第一講で）静止するものと言われたものと同じものであろう。というのも、まさに静止するものが活動へと限定されるからである。また自我の直観との関係において自我の概念であるものは、非我との関係においては直観であるとされる。いわゆる直観作用の概念である（四）。反定立に従って非我に帰せられるのは活動の否定という性格である。それは存在の性格であり、その性格を有するのは廃棄された活動の概念である。従ってそれは根源的な概念などではなく、活動から導出された否定的な概念なのである。

概要（『全知識学の基礎』）の第二章および第三章との比較

我々がこの講義で要請したものがあつたとすれば、それは自我から表象されたものへの移行についての認識一般であらう。この認識、この客観的な認識が限定されたものであらねばならないということは、直観において確認されている。この必然的な限定性から限定可能性が、そしてこの限定可能性から非我が演繹されている。さてこの部分に關して、概要で観察される歩みは全く逆のものとなる。そこでは非我という反定立されたものから出発し、この非我が絶対的に要請され（第二章）、この反定立の働きから限定の働きが導出される（第三章）。二つの歩みはいずれも正しい。というのも、自我の必然的な限定性と非我の必然的な存在とは交替の関係にあるからである。一方から他方へと移行することができる。いずれの歩みも可能である。しかし目下の歩みのほうが次のような長所を有している。自我の限定性は同時に自我と非我との結合手段である。目下の叙述において限定可能性と限定性との関係と呼ばれたもの

は、著書では量、もしくは時には量化可能性とも言われたものに当たると見なした。量をもつのは本来的には定立するものだけである。しかしこのことはここではまだ全く話題とはならない。今であれば、第三章は第二章となり、第二章は第三章となったであろう。非我に関して、今度は別の歩みが採用されたのであり、非我は直接的ではなく、間接的に要請されたのである。

一八頁、註一。この命題によって絶対的否定立一般が確認される。

二〇頁、六。否定立。人は静止なしに活動を定立することはできず、限定可能なものなしに限定されたものを定立すること、非我なしに自我を定立することはできず、従って活動の統一と意識の統一とが生じるのである。

二二頁、九。ここで証示されるのは絶対的な否定立である。この否定立は不可能であるとしたならば、〈誰に対して〉否定立がなされるというのであろうか。自我は絶対的に定立されているのであり、従って絶対的に否定立されるものとは非我なのである。

二三頁、三。「あらゆる歩みとともに」等々。本当のところ話題とされているのは、我々の内で生起するものを明瞭にすることであり、それは古いやり方で進められ、分析されているのである。

二四頁、註一。「そのかぎりで」。この〈そのかぎりで〉の内には、導出されるべきものがすでに存している。〈そのかぎりで〉が意味しているのは量であり、領域である。もし非我が定立されているのであれば、自我は定立されていない、と言うことはできよう。しかし非我が意識において現われるとすれば、同一の意識において自我もまた現われるのでなければならぬ。というのも、何かある一つの自我なしには非我は何も定立することはできないからである。人はある一つの反対物を、その反対物とともに定立することなしには理解することはできない。

二六頁、註一。さてまさに反定立されたものがともに存立すべきであるならば、自我は、意識の同一の作用において反定立されたものをもとに定立する能力をもっていなければならぬ、というのも、一方は他方なしに可能ではないからである。自我の内には総合的に振舞う能力がある。

総合は共定立を意味すべきである。さてしかし共定立されるのは、何か反定立されたものである。しかしある一つの作用において共定立がなされるべきならば、同一の作用において自我は反定立されたものを、しかるにまた多様なものを実現しなければならず、従ってまたそのような作用は広がりをもっていなければならぬ。かかる多様なものがそこにおいて共定立され、かつそれによつて多様なものが可能となるところの作用の広がりが『基礎』において量化可能性と呼ばれたのである。

この行為の意識の内に、そこから移行がなされるところのものとそこへと移行がなされるもの、すなわち行為が自我が存している。意識は何らの作用でもない。意識は静止している。意識の内に多様性があり、そこから意識が言わば導びかれてくるのである。意識の内での一切のものが合一されておき、かつ分離されている。このことが制限、可分性、量化可能性を意味しているのである。二八頁、段落八。

註九参照。「自我ばかりか」等々。このことは誤解を招く恐れがある。自我と非我はただ多様なものの部分にすぎない。両者は同一の意識の内に存しており、両者は分かつたれることはできず、両者は統合された部分である。そこには制限作用が存している。一方のものは他方のものではない。しかしこのことは、自我が、従つてまた非我が再び分かつたれうる、ということの意味するものではない。このことが意味するであろうことは、意識が自我と非我に分離される、ということである。

二九頁。「今やようやく何かが、自我と非我がある」等々。この二つの何かが意味するのは、人は両者に術語を付

与することができるということであり、一方はただ反対定立によって生起する。一切のあるものであることはただ反対定立によつてのみ可能である。

三〇頁、D。ただ証明されているのは、自我が意識されるべきならば、自我は非我というものを定立しなければならぬ、ということである。しかし自我がいかにして非我に至るかは証明されていない。

第三講

第三講（一七九八年〔に口述筆記された〕）

あの移行そのものが直観されるのは、自らの根拠を端的に自己自身の内にもつものとしてであり、ゆえにこの移行という行為は實在的活動と称される。實在的活動とは第一の活動であり、かつこの活動をただ純粹に模写する観念的活動に對置されるものである。従つて自我の活動はこの二つの様式の活動に区分されるのである。限定可能性の根本命題に従うならば、實在的もしくは実践的な能力を定立することなしに、實在的な行為を定立することはできない。實在的活動と観念的活動は相互に制約し、限定しあう。一方の活動は他方の活動なしにはなく、一方の活動が何であるかはただ他方の活動によつてのみ概念把握される。この自由の作用において自我は自己自身にとつて客観となる。一つの現実的意識が成立する。この第一の点に、その意識の客観であるべき一切のものは結びつけられていなければならぬ。従つて自由は一切の存在と一切の意識の第一の根拠であり、第一の制約なのである。

自我の自己定立という行為は無限定性から限定性への移行である。自我がいかにしてそのことを為し、無限定性か

ら限定性へと移行するのかを、我々は反省しなければならない。

(一) ここにはいかなる根拠もなく、我々は一切の根拠の限界に立っている。自らが直に目撃するものを、ただ注視するのでなければならぬ。ここにはいかなる媒介者も存在しない、ということは誰にでもわかることであろう。自我は移行するがゆえに移行し、自我は自己を限定するがゆえに自己を限定する。この移行はただ、自己自身を根拠づける、絶対的自由の作用によつてのみ生じる。それは無からの創造であり、存在しなかつたものの創出であり、絶対に始めることである。この無限定性の内には、それに後続する限定性の根拠はない。というのも、両者は互いに廃棄しあうからである。Aという契機において私は無限定であつた。私の全存在はこの無限定性において廃棄されたのである。Bという契機において私は限定されており、何か新しいものが現に存在している。このことは私自身から生じている。移行が移行するのは、自己自身に根拠づけられた、自由の作用によつてなのである。

(二) ここで現われる活動は実在的活動と称されよう。活動がそれによつて現われる作用は実践的作用であり、活動がそこで現われる領野は実践的領野である。この作用を我々は注視したのであり、なおも注視しているのである。この作用とともに生じる活動は観念的活動と称されよう。

さて、自我、直観するもの、観念的に活動するものが見出すのは、この絶対的自由の作用である。しかしこの作用に何かを反定立することなしには、私はこの作用を見出すことも記述することもできない。私が私自身を限定するとは、私が一つの可能性を現実性に、一つの能力を活動に高めることを意味する。私は絶対的自由による自己限定の作用を、絶対的自由によつて私を限定するという、一つの能力によつて限定する。能力とは活動となる可能性を意味するとしよう。しかしこのことは、能力という概念がそれによつて設定されるところの反省法則なしには、理解されない。能力とは、別の仕方では直観された活動に他ならない。いかなる特殊な作用もただ直観されるのであり、その作

用が一つの能力によって説明されることで、いかなる特殊な作用も絶対的自由の作用のもとにあるのである。活動なしに能力はなく、能力なしに活動はない。両者は一つであり、いずれも他方の側からのみ把握される。直観として把握されるときに存在するのは活動であり、概念として把握されるときに存在するのは能力である。

(二) 観念的活動と実在的活動との明確な区別は容易に示される。観念的活動とは静止における活動、静止の内です立すること、客観の内以自己を喪失すること、客観の内固定された直観の働きである。

実在的活動は真の活動であり、一つの行為である。観念的活動もまた作動しうるものであり、移行でありうるものである。そして自由を直観するとき、観念的活動は実際にそうした移行である。しかしここで移行と言われるものが直観する働きであるのは直観することそれ自身によってではない。その働きは直観される客観から帰結するのである。ここに自由がある。直観するものの内にはただ写しや模造があるにすぎない。観念的活動は実在的活動とは異なり、自らが限定されていることの根拠を自己の内にもたない。従って観念的活動は静止している。観念的活動の根拠は、観念的活動が眼前に有する実在的なもの内に存しているのである。

この二つの活動はただ対立を通してのみ概念把握される。

(四) 観念的活動と実在的活動は、ここでは対立的に、一層鋭く規定されるであろう。

(A) 観念的活動なしには自我のいかなる実在的活動もない。というのも、自我の本質は自己自身を定立することの内存しているからである。この自我の活動が実在的であるべきならば、活動は自我によって存在しなければならぬ。しかしその活動が定立されるのは、観念的活動によってなのである。

我々は自然客観に力を認める。しかし自然客観は意識をもたないがゆえに、それは対自的な力ではない。ただ自我だけが対自的な力をもつ。

(B) 逆にまた実在的活動なしには自我のいかなる観念的活動もない。観念的活動は自我自身によって定立された活動である。それは再び反省の客観となつてしまつており、観念的活動によつて再び表象される。さもなければ、自我は、表象しはするものの、自己自身を再び表象することのない鏡のようなものになつてしまふであらう。——このように観念的活動が再び客観となることが、自我とともに要請されている。しかしこの客観化の働きが生じるのは実在的活動によつてである。後者の実在的活動がなければ、観念的活動のいかなる自己直観も可能ではない。実在的活動がなければ、観念的活動は何ものでもないであらう。

(C) 先に我々が注意を払ふことなしに挙げた、いわゆる直接意識は全く何らの意識でもない。直接意識は、そこから何も超出することのない、おぼろげな自己定立であり、直観されることのない直観である。自我がいかにして直接意識から外出し、自己の内意識を形成するに至るのか、という問いに対して、答えがここで与えられる。自我が存在すべきならば、直接意識は絶対的自由によつて再び定立されなければならない。この絶対的自由によつて自己を眼前に立てることは自由である。しかし自我が存在すべきであるという制約のもとでは、この働きは必然である。

従つて観念的活動は実践的能力の所産であらうし、実践的能力は観念的活動の現実存在の根拠であらう。しかしこの両者は是非とも分けずに考えてもらいたい。観念的なものは実践的なものにおける主観的なもの、実践的なものを注視するものである。自我が注視するかぎり、自我に対して何かが現に存在するがゆえに、ただ観念的活動によつてのみ、自我に対して何かが現に存在するのである。

私は私自身を触発する。実在的に活動するものである私が触発するのである。私は無限定である。私は限定される。私が私を作り、私を限定されたものにする。私が実在的に私自身を把握し、把握するのである。自我が自己自身

を触発する自我であるがゆえに、この触発の働きは、観念的活動、直観の働き、つまり意識を伴う。この意識はまさに、それが一つの意識となるがゆえに、自己直観となるのである。

自己直観は実践的能力の所産である。それは、私が実在的に触発するかぎりにおいて、私は私を注視する、ということの意味する。この注視は自己直観である。

(五) 意識の内に存在しなければ、何も存在しない、ということとは決着済みのこととして想定されている。さて、実在的活動すなわち絶対的自由なしには、いかなる意識も存在しない、ということを我々は見てきた。ただ自由とともに、自由よつてのみ、存在しうる一切のものは存在し、自由なしには何も存在しない。

ゆえに自由は一切の哲学することの、一切の存在の根拠である。君自身に依拠し、自由に依拠するならば、君は確固として立っている。

直接的には、意識は自由に結びつけられており、他のいかなるものも意識に結びつくことなどできないであろう。自由は意識の第一の直接的な客観である。一切の意識は自己自身に還帰するものである。「私には、何かが意識されている」と言うとき、常識が承認するのはこのことである。自我がただ単に主観としてのみ思惟されるとしても、何も説明されないであろうし、人はこの主観に対しても一つの新しい主観を求めなければならないであろうし、それは無限に続くことになろう。従つて自我は主観—客観として思惟されなければならない。

しかしかかる観念的な主観—客観はさらに何かを説明するものではなく、ただこの主観との関係においてのみ客観であるような、私に意識される場所の何かが付け加わらなければならない。このものはどこから生じるというのであろうか。「客観は与えられる」と独断論者は言う。あるいは、批判主義を独断論に結びつけようとするときには、「素材が与えられる」と彼は言うであろう。しかしこの言明は何も説明してはおらず、概念の代わりにただ空虚な言

葉が並べられたにすぎない。

「客観は作られる」と観念論者は言う。この答えはただそう述べ立てられるだけで、何も解決してはいない。というのも、客観が、実在的に活動する存在者としての自我の所産であるとしても、自我は、それが実在的に活動する存在者であるかぎりでは、何ら観念的なものではなく、働く自我が産出するとされる所産は表象するものにとつては与えられる、ということになるであろう。

——問いはただ次のようにしてのみ答えられうる。すなわち、直観するものと作るものは直接的には同じ一つのものである。直観するものは自らの作ることを注視する。意識の対象であるのは、直接的には、客観としての客観などではなく、むしろただ作るという働き、すなわち自由だけである。〈自我が自己自身を定立する〉という命題は観念的意義と実在的意義という二つの分離不可能な意義をもち、この二つの意義は自我において端的に合一されている。実在的に自ら始めることなしにはいかなる観念的に定立することはなく、逆もまた然りである。自由なしにはいかなる自己直観はなく、逆もまた然りである。——自己直観なしにはいかなる意識もまたない。

自由の作用に先行する何ものも存在しない。現に存在する一切のものはこの作用によつて生じる。しかし我々はこの作用を、限定可能性という先行するものから限定性への移行としてより他に思惟することができない。——さて、このように前に進んでも後に退いても、同一のものが現われるのであり、それはただ二つの観点の下で見られており、この自由の作用を中心にして、一切が回つているのである。作用は、その右側に、限定可能性、直接的意識があれば、それ自体としては可能ではない。「そしてその作用の」左側には、産出されるべきもの、直観された自我がある「のでなければ、可能ではない」。両者は、互いに分離されることはできず、絶対的自由に依拠している。

いかなる人間も自らの意識の第一の作用をはつきりと示すことはできない。なぜならば、いかなる契機も無限定性

から限定性への移行であり、従つてなおもまた別の契機を前提するからである。

本来的に実在的な第一のものは自由である。しかしそれを思惟において最初から設定することはできない。従つて「我々は」そこに至るための諸々の探究を最初に設定しなければならない。

第三講

あの移行（第二講）は自らの根拠を端的に自己自身の内にもつ、ということが見出されよう。従つてこの移行という行為は実在的活動と称されるのであり、それはその第一の活動を単に模写する觀念的活動に對置され、そうして自我一般はこの二つの様式に区分されるのである。限定可能性の根本命題によれば、実在的もしくは実践的な能力なしに、実在的な行為を定立することはできない。実在的活動と觀念的活動は互いに制約し、限定する。一方の活動は他方の活動なしにはなく、一方の活動が何であるかは、他方の活動なしには概念把握されることができない。この自由の作用において自我は自己自身にとつて客觀となる。一つの現実的意識が成立しており、およそその意識の客觀であるべき一切のものは今後この第一の点に結びつけられていなければならない。従つて自由は一切の存在と一切の意識の最高の根拠であり、第一の制約なのである。

第四講

記述されたばかりの絶対的自由によつて、私は私をあるものへと限定する。私は定立する。私は限定された状態に

おいて何らかの概念をもっている。いつでも行為は何らかの概念に従ってなされる。私が自由に行為するのはまさに、私が私のために自発的に何らかの概念を構想するときである。——しかしここで我々にとって重要なのは、根拠を明瞭に洞察することである。

(一) 前講において実在的活動として把握されたのは単なる自己触発であった。さてこの触発が直観されたのであり、この触発の内に実在的活動の本来の作用が存していたのである。さて観念的活動はこの自己触発の内で自我を注視すべきであるものの、我々がここまで知りうるかぎり、観念的活動がその注視をなすことはできない。ただ限定可能性から限定性への移行としてのみ、この活動は見られたのである。自己触発ではなく、限定可能性と限定性が見られたのであり、しかも両者が同時に見られたのである。限定されたものは、ただそれが限定可能なものではないという仕方でのみ、認識されうる。——

限定されたものは直観可能でなければならぬ。というのも、意識の制約である自由は、ただ限定されたものが直観可能であるという制約のもとでのみ可能だからである。

しかし観念的活動は、その本来の性格に従えば、拘束され、抑止されている。すなわち、それはただ実在的活動の後を追っているにすぎない。観念的活動を抑止する何かが、この観念的活動に對置されていなければならない。それは実際のものであり、そのかぎりで限定された何かである（限定されたものが何かあるものになるのはいかにしてかということ、今はまだ問題ではない）。このあるものをXと呼ぼう。それが意味するのは、観念的活動はただそれを模写するしかないような存在、本来的な活動を無化する何かである。

実在的活動を廃棄するものとは別の意味において、ここでの存在は受け取られなければならない、ということが示されるであろう。我々は存在について二つの意義を獲得している。ここで我々が語っているものは目的の概念として

示されるであらう。

(二) さてこのXはそれ自身絶対的自由の所産である。すなわち、一つには、そもそも何かあるものが意識との結びつきの内に見在するということ、またもう一つには、まさにXが存在するのであって、存在しない（非Xが存在する）のではないということ、これらのことの根拠は自己活動性の内に存するべきである。

(三) ここで根拠という言葉の説明がなされなければならないのは、意味を明瞭にするというかぎりにおいてである。根拠が何であるかはもつと後になって演繹される。）

観念的活動は拘束されている。それは一つには、観念的活動に対してXなるものが現に存在するということ、またもう一つには、Xが云々に限定されているということである。そのかぎりにおいて観念的活動は受動的である。観念的活動を拘束するもの、まさにXへと拘束するものが付加的に思惟されなければならない。それはXそれ自身ではなく、自由である。この自由がXそれ自身を産出したのである。さてその意味するところは、自由がXの根拠を含む、ということである。それでは一体その根拠とは何であるのか。我々の場合、根拠づけるものは自我として定立される。何がこの定立をなしているのか。観念的なものとは、定立するところのもの、実践的なものを自己自身として定立するところのものである。観念的なものがまさにそのように振舞わなければならないのは、ただ観念的なものだけが、実践的なもの内に何が存在するかを知っているからである。——観念的なものは映すものである。従って実践的なものを、映すものとしても、定立しなければならぬ。観念的なものは、映すという働きを、言わば実践的なもの内に移し入れて見るのである。この場合の映し・像は、実践的なものがそれを介して観念的なものに対して自己自身になるところのものである。直観を帰属させること、その一点において自我が合一される。さてしかし実践的なものは自由に始めるものとしては、模写する働きなどではない。従ってあの実践的なものの像は模写像ではなく、模

範像である。

直観するものはそれ自身拘束されており、それはただ別のものの後を追っている。實在的に活動するものは絶対的に自由であり、後を追うということはない。それは絶対的に自由に何らかの概念を構想しなければならない。この概念は目的概念や理想と称される。そうしたものについては、〈何か^がそれに対応する〉ではなく、むしろ〈何か^がそれに従って産出されるべきである〉と主張される。我々は自由な行為をただ、構想された行為の概念に従って生起するものとしてのみ思惟することができる。ゆえに我々は実践的能力に知性を帰属させるのである。知性なしに自由が思惟されることはないし、意識なしに自由が生じることはない。意識を否認することと自由を否認することは一つである。それは、意識を帰属させることと自由を帰属させることが一つであるのと同様である。自由に行為しうることの根拠は意識の内に存している。

自我は自己自身を限定する。〈それ自身〉という一語は〈それ〉に関係する。それは自己を限定する、しかしそれが自己を限定しているとき、それはすでに自己をもっている。自己を限定すべきものは自己自身をもっていなければならない。自己自身をもつものが知性というものである。

それは自己をもつ。ここには何か二重のものがある。しかしそれは分離不可能なものである。しかしそのように分離不可能な二重のものとは主観—客観性あるいは意識である。これこそが根源的に総合統一されている唯一のものである。その他一切のものはその後をはじめて総合統一される。自己を限定するものは対自的に存在し、それゆえ知性には自由が帰せられるのである。

知性は実践的なものと分離不可能であるだけではなく、知性そのものが実践的でなければならぬ。實在的自由なしにはいかなる意識もない。知性と実践的能力との合一は直接意識であり（第一講）、自己自身を観念的に定立する

ことである。観念的なものを（一人）定立することと見なしてほしい。一切の定立は自己自身を定立することであり、それは自己定立から出発し、自己定立によって媒介されるのである。

従来の哲学者たちの言う自我とは鏡である。さてしかし鏡は見ることはない。それゆえ従来の哲学者たちのもとでは直観することや見ることは説明されない。彼らのもとではただ反映の概念だけが定立される。この欠陥が取り除かれるのは自我についての正しい概念によつてのみである。知識学の言う自我とは鏡ではなく、眼である。一切の内なる精神的なものは外なる像をもつ。自我の分からない者が眼の何たるかを知ることはない。通常の見方では、眼が「自己を」見ることはなく、ただ何かあるものだけを見たとされる。しかし眼とは自己自身を映す鏡である。眼の本質とは対自的に像であることである。そして対自的に像であることは知性の本質である。自己自身を見ることによつて、眼も、そして知性も自己に対して像になるのである。像は鏡に依拠する。しかし鏡は像を見ない。知性は自己に対して像になるのである。知性の内に存在するのは像であり、それ以外の何ものでもない。しかし像は客観に関係する。像が存在するところには、反映される何かが存在しなければならない。それだから観念的活動もまた模写や反映として詳述されたのである。意識が想定されるときには、その客観もまた想定される。ここで言う客観は自我の行為でしかありえない。というのも、自我の一切の行為だけが直接的に直観可能であり、その他一切のものは間接的に直観可能であるにすぎないからである。我々は一切を我々の内に見る。我々はただ我々だけを見るのであり、ただ行為するものとして、ただ限定可能なものから限定されたものへ移行するものとして見るのである。

自我は知性でもなければ実践的能力でもなく、むしろ同時にその両者である。我々が自我を捉えようとするのなら、我々は両者を捉えなければならない。両者は分離されてしまえば何ものでもない。

さて実践的自我の内的一切のものが移し置かれる。実践と直観も例外ではない。さて我々は実在的な自我と純然た

る理念をもつ。我々は実在性から出発しなければならず、これ以降は現実の行為を注視しなければならない。一つの現実的な現事実が現に存在する。すなわち、自我は自我の概念を頼りにして自己自身を限定する。自我には実践的能力と知性が帰せられている。

第四講

自由による自己限定はただ何かあるものへの限定としてのみ直観可能である。自己自身を限定するもの、あるいは実践的なものは、そのあるものについての概念をもっており、その概念は目的の概念と呼ばれる。従って直観するものにとっては、実践的能力の主観は同時に目的概念の能力（の主観）になる。それは、逆に概念の主観あるいは知性が必然的に実践的であらねばならないと同様である。この両者、すなわち実践的能力と知性は分離不可能である。一方は他方なしには思惟されない。従ってこの両者の同一性が自我の性格を成すのである。

「第四講」終わり、以下に「第五講」が続く。